



我が住む町の歴史探訪

株式会社 環境防災

藤好 一男

Fujiyoshi Kazuo

総合技術監理部門、建設部門

1. 引越し

7年前、縁あって今住んでいる場所に引っ越してきた。

当時、仕事の都合で高松市から徳島市に引っ越すことになり、家さがしをすることになった。最初、今住んでいる場所とは別の場所に手をあげたが希望者多数でダメだった。そこで残りの候補地から、会社に近い、感じがいい等の理由で直感的に決めて、徳島市国府町に住むことになった。「国府」、もよりの駅は「府中」、なんとなく歴史を感じた。

何日か経ってから「府中」は“ふちゅう”ではなく“こう”と呼ぶと知った。

2. 国府の歴史探訪

引越し早々、近くの本屋さんで“徳島県の歴史”という本を購入した。しかし、なかなかページをめくることができず、本棚に置いたままになった。

それから4年経って、臨死体験をした。（昨年の徳島県技術士会会報に投稿）その後、“先祖や住んでいる土地の歴史が自分に深くかかわっているのではないか”と思うようになった。

そんなことから、本棚に眠ったままだった本を引っ張りだし、国府の歴史を勉強し探訪しようと思い立った。

(1) さすが国府

645年、大化の改新の時代に県北の粟国（あわのくに）と県南の長国（ながのくに）が統合され一つの粟国（あわのくに）となり、その約70年後に粟国→阿波国（あわのくに）に表記が変わった。

701年、大宝律令の時代から、仏教による鎮護国家として国府が整備されている。国分寺（15番札所）、国分尼寺（石井町）による法華経普及がなされた。さすが阿波国の中心地である。歴史がある。国府の庁舎は、観音寺（16番札所）付近にあったとされている。なんといっても国府には遺跡が多いので、遺跡から千数百年前のことがわかっている。

はたと思う。5～6年前に、誤って工事中に埋蔵文化財を掘削したニュースがあって以来、業界あげて再発防止に取り組んでいることに、“なるほど”と頭の中でつながった。

(2) 国府での源平合戦

いきなり時代が飛ぶが、文献や情報を調べていくうちに、国府の地で“源平合戦”があったことを知った。屋島の戦いの直前のことである。義経が嵐の中を摂津から船出し、勝浦庄（現在の小松島市付近）に上陸して、陸地を通って屋島の平家陣の背後を攻めたことは有名ではあるが、その途中に国府で戦いがあったとは露ほども知らなかった。

源平合戦では義経が脚光をあびるが、ここでは国府の土地に根差していた平家の武将に光を当てる。当時、平家は瀬戸内海を中心に西国を支配していたが、中でも国府には平家の有力武将の本拠地があった。その名を「阿波民部大夫重能（あわみんぶたいふしげよし）」という。

(3) 阿波民部大夫重能

田口成良とも栗田成良とも、成能ともいわれる。

平安時代末期～鎌倉時代初期、阿波国、讃岐国に勢力をはった当時四国最大の武士団をたばねる武将である。一族は、代々中央から国衙（こくが。国府の役所群をいう。）に派遣される国司に次ぐ“介”の地位にあり、国衙の阿波国支配を実質的にこなす武士団の頭領であった。1182年、「重能」は阿波守に任命されている。

一族の活動拠点は、阿波国府と平家の本拠地の京都に、それぞれ「重能」の弟と兄をおいて、拠点としていた。早くから平清盛につかえ、平家の有力家臣となり、日宋貿易の拠点となる大輪田泊（神戸港）の築造奉行をまかされるなど、平家の経済活動をも支える重要人物であった。

阿波国府の武士団は、現在の徳島市の鮎喰川流域～石井町を拠点とし、中でも桜間城が本拠地であった。桜間城は、石井町にある桜間神社付近にあったとされている。ちょうど徳島西環状道路が県道30号徳島鴨島線にタッチするあたりの徳島市国府町と名西郡石井町の境には、どちらにも“桜間”という地名がある。この時代からの名称に違いない。

a) 源平合戦での「重能」

1180年、源平合戦がおこると「重能」は兵を率いて上洛し、悪名高き南都焼き討ちでは先陣をつとめた。1183年、平家の都落ち後、四国にもどり讃岐国を制圧した。平家は“一の谷の合戦”で多くの武将を失い、最後のたのみとしたのが「重能」であった。

b) 屋島に平家の陣

平家は、「重能」の阿波の拠点を再起の原動力として期待し、屋島に陣をはった。「重能」は、屋島に安徳天皇を迎える内裏造営をまかされるなど、四国の武士をとりまとめた。

c) 源義経に虚をつかれる



屋島の平氏は「重能」の子の教能（のりよし）が 3,000 騎を率いて、源氏に味方をした伊予国の河野氏討伐に行っていた。その時、残っていた 1,000 騎を阿波国に 100 騎、讃岐国の各港に 50 騎と兵を分散配置しており、屋島本陣は手薄であった。嵐が吹くなか、阿波に上陸した源義経に虚をつかれ、敗退し、最後の決戦の地、壇ノ浦に向かうことになる。

d) 義経による「重能」の拠点攻め

義経は、屋島の平氏の壊滅をはかるため意表をついて阿波に上陸した。（私見であるが、義経は阿波に平家の拠点があることを知っており、計画的行動だったのではないだろうか。）その際、「重能」の伯父の田口良連（よしつら）が迎え撃ったが、捕まった。義経は「重能」の弟の桜庭能遠（さくらばよしとお）（桜間介良遠（さくらまのすけよしとお）ともいう。）の桜間城を襲撃した。そして、その足で大坂峠を越え、屋島に向かった。

e) 「重能」の最後

壇ノ浦の合戦の後、源氏により鎌倉で処刑された。（他説もある。）

f) 「重能」と仏教

「重能」が処刑された時、「重能」が願主の丈六仏十体を納める阿波の御堂は完成前であった。この十体のうち、九体が東大寺再建の大勧進職（だいかんじんじき）だった重源（ちょうげん）によって、東大寺境内に建立された浄土堂に納められた。（現存はしていない。）私が思うに、それは東大寺を焼失させた「重能」の罪を救ってやりたいと願う重源の心くばりだったのではないか。最後の一体の丈六仏は、丈六寺（徳島市丈六町）の本尊として今もある。このことから、当時、平家の仏教文化が阿波国にもあったことがわかる。

（４）「重能」の祖先“田口氏”

658 年、「重能」の先祖にあたる阿波真人広純（あわのみひとひろずみ）が阿波国司として着任する。その子孫の田口息継（たぐちのおきつぐ）が、808 年に阿波国司として着任し、この地に居を構えた。阿波真人広純の祖先は、蘇我氏らと肩をならべる朝臣“紀氏”であり、さらにさかのぼれば、蘇我氏と同じ祖先である建内宿禰（たけうちのみすくね）となる。

田口氏は、桜間に住み、田口または桜間を名乗った。田口氏の菩提寺は、井戸寺（17 番札所）で、氏神は、上一宮大栗神社（名西郡神山町）であった。

a) 阿波国以前の国府付近（弥生時代～古墳時代）

鮎喰川沿いに、矢野遺跡（国府町）、名東遺跡、庄遺跡、庄南遺跡などに当時の古墳がある。当時、古墳を築造させるくらいの勢力をもった豪族が国府にいたことがわかる。阿波国直前の 7 世紀初めの古墳が、矢野遺跡（矢野古墳）、名東遺跡（穴不動古墳）にある。

b) 戦いの始まり

私は、弥生時代に戦争が起こったのではないかと想像している。国府町にある徳島市立



写真-1 矢野古墳の石室入口

考古資料館で見たのだが、縄文時代の遺跡で発掘されたヤジリは比較的小さく、弥生時代の遺跡で発掘されるヤジリは大型化している。弓矢などの製造技術が進歩したことで、より遠くから大型の動物を狩猟することが可能になったのかもしれないが、稲作が始まり、その収穫した米や耕した耕地を奪うものがおり、その対抗策で戦闘用の弓矢のヤジリとして大型化したのではないかと思っている。

c) 新羅と戦った阿波兵士

「重能」の先祖の阿波真人広純が阿波国司となっていた時代、朝鮮半島では唐と新羅が百済を攻撃した。百済と親しい日本は、百済に見方して3万3千人の大軍をおくった。その中に、阿波真人広純ひきいる5百人の阿波兵士もいた。しかし、日本軍は敗れ、百済もほろびた。663年のことであった。民衆は竪穴式住居に暮らしていた時代である。

律令国家以降、天皇・公家・寺社の直轄領以外の土地は国のものとなった。これにより、新規開墾した土地を私有地と認めさせるには武力が必要だった。

平安時代になると瀬戸内海の家運物を狙う海賊が横行した。海賊対策として、海運を守るための武力が必要となった。田口氏は、穀倉地帯（不動～国府・石井の湿地帯の水田）を支配・私有地化し、権力者となった。また、材木を近畿に運んで財をなし、海運のために海上交通を支配した。

d) 阿波国歴史上最初の武士団の頭領

平将門の乱に呼応して、939年に日振島（愛媛県宇和島市）を拠点に海賊化していた藤原純友が瀬戸内海で反乱をおこした。これを治めるために、「重能」の先祖にあたる桜間文治直行が瀬戸内海水軍を率いて、純友を討ち、南海を平定し武士団の頭領となった。

(5) 「重能」没後の田口氏

「重能」の死によって、源平合戦後の田口氏の勢力は衰えたが、上一宮大栗神社の宮司は継続して、つとめていた。

a) 上一宮大栗神社の宮司

代々にわたり田口氏は、上一宮大栗神社（名西郡神山町）の宮司をつとめていた。上一宮大栗神社は、大宜都比売命（おおげつひめのみこと）を祀っている。古事記では、大宜都比売命は、イザナギノミコトとイザナミノミコトにより生まれた四国のうちの阿波の神であり、食物の神である。阿波国の祖神である大宜都比売命を祀る神社の宮司になることは、その地域を統治する資格者となることを意味するもので、武士団の頭領や豪族の長が宮司となることを望んだ。1185年（重能が阿波守の時代）、上一宮大栗神社は社格が最高の“正一位”となっている。

b) 田口氏討たれる

源平の戦いの後、佐々木氏が阿波・土佐・淡路島の三国の守護職となり、鳥坂城（茶臼山城とも呼ばれる。名西郡石井町）を築いた。それから35年後の承久の乱（1221年）の時、後鳥羽上皇方に見方した佐々木氏を鎌倉幕府方の小笠原氏が討ち、鎌倉時代～南北朝時代

にかけて小笠原氏が治めた。小笠原氏は、一宮城（徳島市一宮町）を築いた。一宮城主の小笠原成宗は、名族の田口氏が上一宮大栗神社の宮司として、一宮城背後の地（神山町神領）を支配していることに不安を抱え、田口氏を討った。その後、一宮氏は自ら阿波国造と称して上一宮大栗神社の宮司となった。

c) 田口氏のその後

神山を追われた田口氏は、三河国にうつり、血筋は継続する。「重能」の孫の成継（しげつぐ）が、承久の乱の際に鎌倉幕府方で参陣し、その恩賞により三河国牧野郡の地頭となり、後の徳川譜代大名“牧野氏”の祖となった。

3. 国府ロマン

「阿波民部大夫重能」を中心に、国府の歴史を探訪してみた。あまり知られていない歴史の一端にもふれることができ、没頭した時間だった。自分たちが住んでいる地下を掘れば、タイムマシンにのったように、時空を超えて過去の人々の生活に繋がっている。

私は、今住んでいる国府が17箇所目の住まいになる。建設関連業界にいるため、いろいろな場所で地下を掘ることに携わってきた。今から思えば、その土地の歴史に踏み込んでいかなかったことを残念に思う。今後は、その地にどんな歴史があったのかと思いをさせながら、携わっていきたいと思う。

最後に、国府にはロマンあふれる歴史がまだまだあることを少しだけご紹介したい。

義経が桜間城を攻めるにあたり、国府の地を見通しの良い山から眺めて作戦を練ったといわれているのが、気延山（きのべやま。きのべさんとも呼ぶ。）になる。国府町の矢野遺跡がある山になる。義経一行が、この山で休息したことから、それ以降、気延山という名称になったといわれている。現地でちょうど休息している地元の方に出会った。その方と話をした際、この山を“おやま”と敬ったように表現されたことが印象深く、調べてみたくなった。

気延山と呼ばれる以前は、矢野神山と呼ばれていたようだ。山頂にあったとされる社が紀元前の頃に気延山南麓の杉尾山に移されたとされ、八倉比売神社（やくらひめじんじゃ）として祀られている。先にあげた上一宮大栗神社と同時期に“正一位”となっている。神社略記には、“阿波における天照大神”の記述があり、社殿裏手に五角形の石積み祭壇がある。一説には卑弥呼の墓であるという。

—以上—

（文中には、諸説ある内容を含む。）



写真-2 八倉比売神社参道